

鳴門旅行記(下)

上田 雪江

十六時十一分発のマリンライナー号に乗った。指定席なので、ゆったりとしている。喉が渴いたと言うので、ウーロン茶を四本買い、分け合って飲んだ。子どもたちは、少し苦いと言っていたが、余程、喉が渴いていたのであろう、全部なくなった。

列車が動き出した。またトランプをしたり、写真を撮ったりした。ある子どもが、私の頭をさわり、

「先生の頭に白髪があるね。」

と言いながら、白髪を何本か抜いた。それを他の子どもたちに見せて歩いている。ある子が、両手を口のところに当てて、車内を何か言っている。よく聞くと、

「みなさあん、上田先生の頭には、白髪がありますよお。」

と、何度も言っている。『なんて子だろう』と思って見ていると、他のお客さんも、くすくす笑っている。『まいった、まいった!』である。そうするうちに瀬戸大橋に差しかかったので、

「これが、瀬戸大橋よ。」

と言うと、カメラを持って写す子、海や船を見て歓声をあげる子、とさまざま……。その時、

「先生、瀬戸大橋って、どこにあるん？」

と、一人の子が聞いてきた。私は、えっ！　と思つて、

「今、通つているところが瀬戸大橋なんよ」

と言つたが、その子は「ふうん」と言つて、海の方をじつと見ていた。この子は、渡る前の瀬戸大橋のイメージを、どのように描いていたのであろうか？　そして、『今、通つているところが瀬戸大橋なんよ。』と言われ、どう感じているのであろうか？　と思ひながら、私は、その子の様子を見ていた。きつと、自分の目で、橋を見られると思つていたに違いない。

高松駅へ十七時七分に着いた。また乗り換えである。乗り継ぐ時間が六分しかないので、急いで乗り換えた。

子どもたちも私の後を必死でよく付いてきた。高松駅十七時十三分発徳島行うずしお十五号に乗り込んだ。指定席はなく、ばらばらになつて座つた。それぞれのところで眠つたり、景色を見ていたが、次第に席が空いてくる

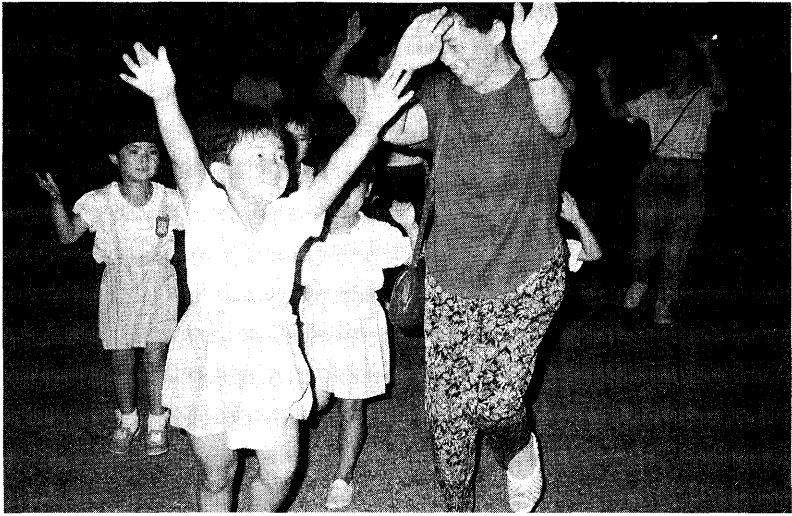
と、少しまとまつて座ることができた。すると、また賑やかになり、トランプやおしゃべりが続いた。十八時二十六分、待ちに待った徳島駅に着いた。子どもたちは疲れも見せず、元気に降りて行つた。改札口には、たくさんの鳴門の先生たちが、お出迎えしてくださつた。挨拶もそこそこで、宿舎へ歩いて行つた。今度は、私の前をどんどん歩いて行く。うれしくてたまらない様子で、歩きながら側転をしたり、鳴門の先生たちとお話をしたりして、宿舎に着いた。とても大きく、きれいな宿舎なので、子どもたちも大喜びである。私がフロントで手続きしている間、何人かはじゅうたんの上で側転をし続けている。フロントで鍵をもらつて、エレベーターに乗つて部屋に行つた。時間は十九時だつた。

「これからどうしよう？」

と話していると、鳴門の先生が、

「公園で阿波踊りをしているから、見に行く？」

と言つてくださったので、早速みんなで出掛けた。道中、小高い山の裾が散歩道になつていた。そこを歩いて



▲ 阿波踊りを踊る

行くと、石垣の穴にカニが何匹かいた。ここはカニの巣だそうである。ひとりの先生は難無く、そのカニを捕まえられるが、子どもも私もちょっぴり怖いので、キャッ、キャッ、言いながら手を出したり、引込めたりしていた。そして、また進むと、芝生の周りが池になっており、芝生の上を転んだり、池の中の渡り石をピョンピョン跳びはねたりしながら公園に向かった。辺りが、だんだん暗くなってきたが、子どもたちは元気そのものである。鳴門の先生方が花火を用意してくださったので、花火を楽しんだ。太鼓と笛の音が、賑やかに聞こえてきた。子どもたちは自然にリズムに合わせて体を動かしている。周りの人が、みんな踊りだすと、おどらにや、そんな」といった気持ちになって、気がつくると、子どもたちも先生たちもみんな踊っていたのである。さすがに疲れたらしく、汗だくだくである。

「先生、おなかが空いた!」「喉が渇いた」

と言ったので、時計を見ると、お腹の空くはず、二十時である。急ぎ足で宿舍まで帰った。一人の子は、阿波踊

りを踊り続けて帰った。

夕食は、宿舎の中にあるレストランで、豪華な気分になり、みんなきれいに、おいしく食べた。

「まだまだ、ここにいたいなあ。」

「あした、帰りたくないね。」

という話が聞こえてくる。何と元気のいい子どもたちだろう。大人の方が、先に参ってしまいそうである。

「さあ、お風呂に入るよ。」

と言って、部屋に戻った。子どもが、お風呂に入る支度をする間に、山口で心配している家族の方に『無事であること』の電話をした。やはり、どの家族も電話を待っておられた。

順番に三、四人ずつお風呂に入った。みんなさっぱりして、いい気持ち！ 今日一日の活動を振り返ってみると、凄いエネルギーな動きである。

「今日は疲れているので、もう寝ようね。」

と言うと、

「まだ元気があるから、トランプしよう。」

「しよう、しよう。」

とあまり言うので、つい負けてしまって、

「少しだけよ。」

と言って、七ならべをした。

「明日は、幼稚園に行くのだから、今日はこれでおしまよ。ぐっすり眠ってね。」

今度は、とても素直になり、ふかふかのお布団に入った。すぐ寝息をかいいている子、お布団の中で、友だちと、こそこそと、おしゃべりをしている子もいる。しばらくすると、みんな、ぐっすり……鳴門の先生は、この子どもたちが深い眠りにつくまで見守ってくださいました。ここで初めて、ホッと安心をし、今日一日、無事であったことの感謝をせずにはおられない気持ちになった。

七月十四日(土) 晴れ

とても爽やかな朝を迎えた。子どもたちの朝は早い。

「おはよう。」「おはよう。」

と声を掛け合っているうちに、ひとり、ひとりと目を擦

りながら起きる。しかし、夜、寝た場所と違った場所にいることが、不思議に思っている子もいる。とても疲れていたのを足掻いていたのであろう。おねしよを心配していた子どもも、朝、出ていないのを見て、安心したのか、私と顔を見合わせて、にっこり！ ひとりには、余程疲れていたのであろう、なかなか目が覚めない。その子を、みんなは起こそうとせず、

「まだ寝かせとこうね。」

「ひとつだけ、布団残しとこうね。」

など、優しい心遣いをしている。そうして、みんなで布団をたたんでいった。

着替えなどの支度ができると、寝ていた子も目を覚ました。その子の支度を待ってから、

「さあ、朝ご飯を食べに行こうかね。」

と、夕食を食べたところのレストランへ行った。

「おはようございます！」

と、みんな元気にあいさつして、用意されたテーブルについた。メニューは、牛乳・トースト・サラダ・ベーコ

ンエッグ。全部平らげて、びっくりするほど食欲のある子もいれば、朝の食事は進まない子もいたが、健康状態は全員良好！ 先ずは安心……この調子で、今日も一日、元気で楽しく過ごすことができるようにと願った。それぞれ自分で荷物の整理をした。水着だけ持って、荷



物はフロントに預けて、これから幼稚園へ出発！ 二列に並んで、足取りも軽く歩いて行くと、乗用車で通園している鳴門のお友だちが、手を振って、あいさつをしてくれた。十分足らずで着いた。幼稚園の玄関では、お友だちや先生が温かく出迎えてくださった。

「おはようございます。」

「お世話になります。」

「おはようございます。」

「よくいらっしやいました。」

と、あいさつを交わしていると、もう、さっそくお友だちからプレゼントをもらったり、手を引っ張ってもらって案内をしてもらっていた。ランチルームからは、おいしそうなカレーの匂いがぶんぶんしている。子どもたちは、それぞれのところで、自分の居場所を見つけて遊んでいた。しばらくすると、ホールに集まって、歓迎会をしてくださるということで、みんな集まった。その時にはもう、新しいお友だちができていて、おしゃべりしている姿も見受けられた。歓迎会の中で、たくさんの心あ

る素敵なプレゼントをいただいて、照れたり、喜んだりであった。こんなにもてなしていただいて、本当に有り難いことと、胸が熱くなった。

「ランチルームで、カレーを食べていらっしやい。」

と言われた。このカレーは、昨日から私たち小鳩のために、作ってくださったそうである。子どもたちが、それぞれで時間をつくって、おいしそうに食べている。カレーをしっかりと食べて、また遊んでいる。

「先生、ちょっと来て！」

慌てて駆けてきたので行ってみると、一人の女の子が大きな桜の木に登っている。

「先生、見て！こんなに高いよ。」

「すごいね。気をつけてね。」

ひとりひとりが、だんだん自分を出している。この姿を見て、この子たちは、遠慮や気後れをする事なく、過ごしているので安心した。私は、胸の中で、『この調子！しっかり遊んで！』と思った。また、ある子が、

「先生、この人は、なんで『ことば』が違うん？」

と聞いてきた。発音が大阪弁に近いので、そう思ったの
だろう。

「そうね、なんでかねえ。先生も初めて聞いた時は、

『変だな』と思ったけど、自分が言っていることば
も、鳴門の人が聞くと、『おかしいなあ』って思っ
るかもしれないよ。」

と話した。それでも、そこにいて私の顔をじっと見てい
るので、

「東京・大阪・九州・沖縄って所も、ことばが違って
聞こえることもあるのよ。」

と言うと、

「ふう〜ん」

と不思議な顔をしていた。ことばの発音の違ったところ
で、会話をしていた子どもたち……どんな気持ちなのだ
ろうか？ その時、初めて、そんな思いで、子どもたち
の会話をしている姿を見つめた。

二階の絵本のお部屋に行ってみると、園長先生と子ど
もたちが、お土産に持って行った“ウォーリー”の本を

見たり、トランプをしていた。興味を持って、楽しそう
にしているのを見て嬉しくなり、『持ってきて、良かっ
た』と思った。

私は、鳴門へ行ったら、蚕の繭から、糸を紡いでみよ
うと、繭を持ってきていたので、鍋とガスコンロを用意
してもらった。お湯が沸いたところへ繭を入れて、糸を
紡いでいると、

「何しとるん？」

「繭から、糸を取ってるんよ。」

と言って、糸をくるくる巻いていると、

「私にも、やらせて。」

と言って自分で巻いて持ち帰った子もいた。

「そんなんしたら、中の蛾が死んでしまうて、かわい
そうじゃん。」

と言っている子もいた。この子は、繭の中から出てきた
蛾を、よく知っているのであろう。しかし、蚕が蛾にな
るまでの生息は、よく観察するけれども、繭から糸を取
り出す過程は、なかなか、やらない場合が多い。そこ



▲ 蚕の繭から糸を取っているところ

で、やってみたのであるが、短時間だったこともあるので、このことが、子どもたちの目にどのように映ったのであろうか。

それが終わってから、子どもたちが遊んでいるところを通りかかった。すると、

「ぼく、もっといっぱい、ここにいたいよ」

「帰りたくないね。幼稚園はきれいじゃし、先生は上田先生より優しいし……」

こんなことを私の前で堂々と言うのだから、余程、居心地が良かったのだろう。

ぼつぼつ、降園の時間になってきた。帰る支度をしている友だちが、

「また来てね。わたしも今度、行くからね」

と言うことばが聞こえてきたので、微笑ましく思っただけで聞いていた。そうして、友だちを迎えに来られたお父さんやお母さんと一緒に帰って行くのを、見送った。

それから、ランチルームに招かれ、先生方と一緒に会食をした。サンドウィッチにおむすび・牛乳・フルーツ

など、たくさん戴いた。おまけに、

「帰りの列車の中で食べてください。」

と言って、おむすびも戴いた。

ぼつぼつ、山口へ帰る時間となってきた。たくさん戴いたお土産をそれぞれ持って、大変お世話になったことへのお礼を言って、名残惜しく、幼稚園を後にした。会館のフロントで荷物を受け取り、徳島駅に行った。すると、鳴門のお友だちやお母さん、それに先生たちも見送りに来てくださった。列車を待つ間、そのお友だちや先生に、『アルプス一万尺』の難しい手遊びを教えてあげていた。間もなく、徳島発十四時十六分うずしお十四号・岡山行の出発である。指定席で、乗り換えなしの岡山行なので、気持ちもゆったり……。列車が見えなくなるまで手を振りあって、お別れをした。列車の中には、昨日、公園で先生に採ってもらったカニも、ケースの中に入れて乗っている。

列車に乗って、しばらくは、おしゃべりやトランプをしていたが、さすがに疲れたと見えて、全員、岡山まで

眠った。岡山駅から、ひかり十四号に乗った。先程、

ぐっすり眠ったので、新幹線の中では、また元氣いっぱい……。また賑やかな旅になる。車内では、鳴門で戴いたおむすび・サンドウィッチを平らげてしまい、鳴門に出発する時と同じ状態のように思えた。

食べる子は、育つ……

寝る子は、育つ……

とは、よく言ったものである。小郡駅に十八時二十六分に全員無事、元氣いっぱいに着いた。お父さん、お母さんのお迎えに、にっこり……。お迎えができなかった方は、お家で首を長くして待っておられたに違いない……。あれほど夢見て、願っていた鳴門旅行が実現できたので、それぞれの家庭で、鳴門のお土産話に花が咲いたことだろう……。

第一班の鳴門旅行記 おわり

(宇部市・小鳩幼稚園)